魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

神白漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

　このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

【Nコード】
N4842Y

【作者名】
神白漣

【あらすじ】
　世界は暗黒へと導かれる。それを阻止するために立ち上がった勇者翔。人類の明日、日の光を見ることはできるのだろうか。すべては彼らにかかっている・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
…………………………………………………・・・
・・
・・・・・・うそです（笑）テンプレ転生者が面白おかしく第二の

人生を歩んでいくお話です。

プロローグ（前書き）

初投稿です。温かい目で見てください。

プロローグ

初めまして。俺の名前は天年翔。年は、１８。今年度で高校卒業のはずだった。なんで、過去形なのかって？
それは・・・・・・・・・・・

俺がさっきしんだからさ（笑）いや、笑えないよ。死にかたが虚しいですよ。進学校の生徒の朝は早い。なぜなら、補習という名の拷問があるからだ。真剣な話、朝の7時半に登校とか俺に死ねと言ってんのか？まぁ、もう死んじゃってるんだけどね。で、今日俺は珍しく寝坊してとても急いでいたんだけど、やはり朝食は食わんといかんやろ。だから、家のババアに「朝飯」て言ったのよ。え、反抗期かって？いや、もうねそんなもの小学生の時にすぎました。でも、ババアも寝坊で、なんも作ってなかったから、バナナを食べたわけよ。それで、食い終わったバナナの皮を投げてしまったのが、運のつきやった。そう、俺は急いで学校に行こうとして、バナナでを・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・滑らせなっかたんだ。えっ、そこはすべろよ、だって？うん俺もそう思うだって俺の死因は葱を踏んで、
転んで頭を強打してしんだんだ。絶望した！足を滑らせた原因が葱なことに絶望した！と、当初はあまりの残念さに、周囲の状況にきづかなかったのだが、落ち着いてみると、俺は驚愕した。だって、目の前に土下座している幼女がいるんだぜ。お兄ちゃんビックリ！

「あの、なんで君は土下座してるの？」

「本当に、すいませんでしたー！！」

Ｗｈａｔ！？

説明中・・・

「つまり君は神様で俺の書類（人生）の幸運を誤って最低ランクにしちゃったら、俺死んじゃったわけ？」

「はい、そうです。ごめんなさい！」

「神様なんで、なんで俺の死因が葱なんですかー！！！」

「えぇー！怒るとこそこ！・・・原因はあなたの母親が昨日使った葱を外に出していたからです。」

「あの・・・・くそババア！！！！（全国のおっかさんすいません）」

主人公暴走のため次回に続く？

「続かんわ、ごめん神様取り乱して」

「いえ、誰しも叫びたい時があるものでしょう」

なにこいつ、お前が一番の原因だ。で、結局なんで俺はこんなところにいるんだろ？

「それはですね、私のミスであなたを不幸にしてしまったため転生してもらうかと？」

転生？あの輪廻転生のこと？

「まぁ、そう捉えてもらって構いません。つきまして何か要望はありませんか？」

「要望て何を？」

「例えば、ＮＡＲＵＴＯ写輪眼とかブリーチの斬魄刀とかですよ」

「つまりアニメや漫画などの技や能力などを要望していいということとか。なぁそんな能力が必要なほど危険な世界なのか？それといまさらだけど俺の転生場所てどこ？」

「そうですね、まあまあ危険でしょうか。それと転生場所は『魔法先生ネギま！』です。」

「俺はねぎに恨みでもかっているのか。」

「それで、要望はどうします？」

「そうだな、まずは俺の幸運ランク、直感ランクをＥＸにしてくれ。」

「へぇ～、そこから行きますか。はいいいですよ。」

「で、次に『伝説の勇者の伝説』の全ての式を解くものと全ての式を編むものをあわせた、ライナ＝エリス（寂しがり屋の悪魔）をくれ。もちろん代償なしで頼む。」

「これは、チートですね。でも代償はなしは無理なので、魔力の消耗ですね。」

「あぁそれでいい。後これが最後なんだが『Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎ』のノアの能力をくれ。これは人間を殺したいとかの殺人衝動を抑えてくれ」

「はい、わかりました。わたしもその漫画好きですから、力入れて頑張ります。それじゃ、新しい人生たのしんできてください。」

「あぁ、神様ありがとな。」

そういって俺の意識は闇へと沈んでいった。

Ｂｌａｃｋ　ｏｕｔ，，，，

プロローグ（後書き）

主人公チートですね。私は自重しませんので。

次回、主人公の転生先がわかります。では、よろしく。

ここは田舎です。（前書き）

なんとか、書き終わりました。では、どうぞつたない文章ですがお読みください。

ここは田舎です。

ここは、どこなんだろう？意識が戻り周囲の状況を確認したところ自分が縮んでいた事実に驚愕したよ本当。あの幼女神、赤ちゃんからやり直す言えや。ということで、ベビーベットから周囲を見ること叶わず、睡魔に襲われそのまま目を閉じていった。お休み。

五年後・・・

いやぁ～久しぶり。自分の新しい名前とここがどこなのかわかったよ。あの後、うちの母ちゃんに起こされてビックリ、母ちゃんマジ美人。で、どうやら俺の名前はマギ・スプリングフィールドていうらしい。うん、外人さんだね。で、ここはイギリスのウェールズの森で魔法使いの隠れ里らしい。俺さぁ『魔法先生ネギま！』の原作て知らないんだよね。だから、最初、村で人が飛んでいるのには腰を抜かしてしまったよ。題名に魔法てあるじゃないかって、勘弁してくれよ、一般ピーポーだった俺に、空飛ぶ人間や擬似雷落とすやつ見たら、わぁ～ファンタジー何てのんきなこといってられません。

あ、能力だけどね、神様は約束守ってくれたよ。まず、幸運と直感だけど、新しいお母様、下の弟を産むとき、産んだら死ぬってお医者さんにいわれてたけど、滅茶苦茶神頼みしたら、すごく安産でした。これおれのおかげじゃない？後、直感だけどだいたい何か自分にとって都合の悪いことが起きるのがわかるよ。うん、これは本当に助かる。

次にライナ＝エリスだけど、これはやばい。ありとあらゆる構成式が見えるし、一回全てを解く式で森の木を解除したら制御できず

に森の木全部消してしまい、あわてて全てを編む式を使って修復したよ。そのとき、軽い脱力感に襲われたんだけどこれが多分代償の魔力消耗なんだろうと思いました。

最後にノアの能力なんだけど、３歳ごろ死ぬほどの原因不明の高熱に襲われ１か月悪夢にうなされたよ。で、世界の終焉だの人間を殺せ殺せとうるさかったけど、神様がちゃんと殺戮衝動を抑えてくれたらしく、暴走することなく目がさめたよ。で、そのあと顔を洗おうとしてこちらの世界にきて何度目かわからないけど、口をぽっか～んと開けたままのあほ面してしまった。そういや、神様、Ｄ・Ｇｒａ，力入れるて言ってたっけ？しかも俺、容姿がティキミックなんだよね～。変な所まめで似せないで欲しい。だって、鏡見たら額に聖痕が浮かび上がっていたんだもん。母さんにえらく心配してきて宥めるが大変だった。でも、抱きつかれたときに胸が当たった時は役得とか思ったけど。で、高熱出した後ノアズメモリーのおかげなのか、力は簡単にに使えた。お気に入りは快楽のメモリーかな。空気の足場をかためて空を飛んだ時自分も脱一般人になってしまったこと自覚し、

少しだけ寂しかったといっておこう。

「兄貴～！飯らしいぞぉ～！母ちゃんが来いって。」

うん？考え事していたらいつの間にかこんな時間か。

「わかった、今いくよ、ナギ」

続く！

ここは田舎です。（後書き）

かなりのご都合主義ですね。ナギの兄さんとしてがんばります（笑）

定時連絡です。（前書き）

今回は少し短いです。ではお楽しみを。

定時連絡です。

やぁやぁ、朝の人にはおはよう、昼の人にはこんにちは、夜の人にはこんばんは。みんなのヒーロー、マギだよ～。えっ、みんな、そんな悲しい子を見るような目で見つめないで～

ごっほん、ふざけすぎてすいません。この世界に産まれて早十年。うん？進むのが早すぎるだって？これは、大人の事情です。いい子、悪い子関係なく、深く突っ込まないでくれると非常にうれしい。

5歳のころから、魔法使いとして修業初めたんだけど、大方の魔法は使えるよになったよ。まぁ、魔眼のおかげなんだけど。でも、魔力制御は大変だった。俺は、先天性魔力超過現象という病気で、普通の魔法使いの三十倍の魔力保有者らしい。そのため、子供のころにはその魔力には耐えられないので、『ハーメルス（神を縛る紐）』というマジックアイテムで一般魔法使いレベルまで抑えている。それでも、本質の魔力量は変わらないため制御が大変。完璧にできるようになるまで三年かかった。

後、気なんだけど、瞬動、虚空瞬動ぐらいでほとんど手を付けてない。それより魔法が楽しくてしょうがない。術式がわかるおかげか、パズルのように入れ替えたり組み替えたりしているうちにはまってしまった。そのため、周りに魔法オタクとよくからかわれる。

周りといったが、うちの村はそこまで大きくないため、子供の数が俺とナギ後、年の離れた兄を含めて、5人ほどしかいない。そのため、俺とナギという小さい子供はまるで村の子供の用に扱われ、悪さばっかりするうちのおバカな弟は近所のスタンおやじにいつも

怒鳴られている。

俺はどうなんだかって？前世は後少しで社会人な人間が子供のあふれるパワーにはついていけません。しかも、うちのマリア母様は病弱なため、なるべく大人しくして、家からあまり出ません。えっ、このマザコンやろうですって？失礼な、その通りです。だって、荒ぶる炎のように紅い滑らかな髪でありながら、今にも消えてしまいそうな儚げな微笑み。これを女神と言わずして何と言う。と、まぁ楽しんでいるおれです。

side out

マリアside

私には三人の息子がいる。長男はもう立派な大人で村を離れて仕事をしている。今私はマギとナギの子育てが大変。ナギは活動的でよくイタズラをしては、村長のスタンさんに怒られている。マギはナギと違いとても大人しい子で病弱な私をよくサポートしてくれる。最初のころはいろんな病気にかかったりして大変だったけど、いまではナギの面倒をよく見てくれるいいお兄ちゃんだ。それに、勉強もよくできとても優秀だ。だが、あの子の魔法関係に関してはいまだに苦労が絶えない。五歳のころ初めて魔法の初歩『プラクテ・ビギナル（火よともれ）』を唱えさせたら、火炎放射のように火が出て危うく家が燃えそうになった。そこからは、まず魔力制御に力を入れながら教えようと思った私は悪くないと思う。しかし、マギは天才だった。一度教えた魔法はすぐに覚えてしまい、しかも現存する魔法をより効率よくしたり、威力をあげたり、さらには新しい魔法まで作ってしまった。しかもその作った魔法がえげつない。魔法反射てなに！？アンチマジックフィールド？魔法が使えないじゃない！ととんでもないものを作っていく。たぶん本国やアリアドネー

の学者たちに見せたら腰抜かすわね。まぁ、このように私の可愛いエンジェルちゃんマギが天然魔王に見えるのは気のせいじゃないよね？はぁ～私この子の育てかたどこで間違ったかしら。

side out

定時連絡です。（後書き）

いやぁ勝手に解釈してしまいました。お母様の名前ありきたりですがどうですか。

やはり、シンプルイズザベストだと思いました。

というかナギの母親はどうなっているのかわからなかったので勝手に改造しました。

では次回はいよいよ冒険のプロローグです。よろしくお願いします。

旅は道連れ、俺は拉致られ！？（前書き）

本日二度目の投稿。

よろしくお願いします。

旅は道連れ、俺は拉致られ！？

三人称　ｓｉｄｅ

ここはメルディアナ魔法学校。旧世界において小学生程度の子供たちに、魔法と一般教養を教える機関。また、裏を返せば「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」つまり、メガロの忠実な犬を育てるための場所である。

そこに二人の天災がやってきた。二人は今校長先生に怒られている。

「アニキ～俺眠たいだけど、寝ていい？」

真っ赤な髪を持つ兄弟のうちのアホ毛の弟が、目をこすりながら自分の兄に尋ねている。

「駄目だ、今はとにかく爺の話聞いとけ。聞かないと癇癪を起して説教が長くなる。」

前半だけ聞けば、優等生だが後半ですべて台無しである。

「これ！マギ！ナギ！儂の話を聞いとるのか！！」

「「聞いてない。」」

「うがぁー！！」

今日この二人がここに呼ばれたのには理由がある。弟のほうは座学が大っ嫌いで、授業は抜け出すは、教師に雷の上位古代呪文『千の雷』をぶちかましたりと問題を犯し、兄のほうは成績は優秀だが、優秀過ぎて周りがついてこれず、ついには一人の魔法教師が自信をなくし、田舎に帰ろうとするなど、二人ともアプローチは真逆だがかなりの問題児らしく、他の教師では手におえないため校長室に呼び出された。

が、二人の問題児ぶりはすさまじく校長も、もうゴールしてもいいよね、安西先生、とフォフォフォの白髪のぽっちゃりの幻覚が見えたらしい。

「ナギ、どうしてお前は教師に魔法を唱えたのじゃ。魔法は危険なものとわかっってるじゃろうに」

校長は気を取り直して少し咎めるように少年に聞く。

「だって、あいつ俺が魔法が覚えられないのバカにしやがったんだぜ。しかもアニキの名前まで出してきて。だから、ついカッとなって、、、」

ナギは最初は怒りながらしかし、後から自分がしたことに少し反省し気落ちした声で喋った。ナギには一つ違いの兄がいる。兄は本物の天才だと思っている。魔法の腕、戦闘術すべてにおいて自分より強い兄を尊敬していて超えたいと思っている。一体お前はどこの戦闘部族だと突っ込みたい。

校長も今回のことはナギだけが悪いわけではなく教師にも責任があるとわかった。後、マギの無自覚天災のせいでもあるが。優秀なものは何かと僻まれるがマギに至っては、魔法ではこの学校で右に

出る者がいないバグ。そのため、僻みがナギに降りかかっているのが現状だ。まぁ、術式無茶苦茶な状態で千の雷を発動させるナギも十分バグだが。

「まぁ二人ともこの学校に少しずつでいいから慣れていくのじゃ。友達を作るでも何でもいいから楽しんでいきながら大人になるための準備をしなさい。さぁ明日も早いからのぉ～。ここらでお開きじゃ。気を付けて帰るのじゃぞぉ～。」

俺精神年齢大人なんだけど、と思いながら何ともしまらないマギがいたらしい。

side out

ナギside

おっす！俺はナギ・スプリングフィールド、最強の魔法使いだぜ。ま、まぁ兄貴には勝てないんだけど。はぁ～だいたい魔法合戦したら確実に負ける。近接戦闘に関しては身体能力では勝てるけど、アイキドウ？だとかいう、日本の武術でいつの間にか倒されてるし。それで兄貴になんで、日本の格闘術を知っているのか？て聞いたらすごく焦っていたけどなんでだろう。まぁなんか旅の人に教えてもらったて言ってたけど。それで納得した俺を見てこいつがアホで良かったって聞こえたのは聞き間違えだろうか？

しかも「情報は命だ」が信条らしくなぜか聞いたらほとんど答えられる。何でも知ってるんじゃないか？と言ったら何でもは知らない、知っていることだけだといって、その後俺は厨ニ病じゃない、厨ニ病じゃないと悶えていた兄貴は気持ち悪かった。

で、結局兄貴には全くかてねぇ。だけどいつか必ず勝ってやる。そのためには・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

マギｓｉｄｅ

家に帰ったら、母さんにも怒られた。ナギは「あらあら」とほんわか注意だったけど、なぜか、俺だけは「お願い自重して」と頼まれた。異様に母が疲れているのは気のせいだろうか？母さん大丈夫？と聞くとあきれた目で見られた。少し寂しかったのは言うまでもない。

魔法学校に通ってから思うことなんだけど、俺は全然この世界ことを知らない。いや正確には裏社会の現状を知らない。情報はあらゆる富より価値があると俺は思う。どうにかして、世界のことを知れないだろうか。そんなことを思いながら日々の訓練をしていた。

朝、目が覚めたら俺は我が弟に拉致られている。何でも魔法学校では俺より強くなれないから外の世界で強い奴と戦いに行くらしい。俺も情報集めがしたかったからそこまで気にしない。ただ、俺も外でいろんな奴と勝負したら強くなれるんじゃないか。それを言った時のナギのあほ面は死ぬまで忘れられない。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ナギがマギを超える日は来るのだろうか？

マギ十二歳、ナギ十歳、相も変わらずしまらない旅立ちであった。

旅は道連れ、俺は拉致られ！？（後書き）

ナギのアホっぽさは出せたでしょうか？

ナギの赤い悪魔化。彼にも遠坂家の呪いがかかっているのでしょうか。

それでは次回むっつりスケベ（青山詠春）と異常性欲者（アルビレオ・イマ）がでます。

ノシィ～

旅にお金は必要です。（前書き）

今回はあのムッツリーニの登場です。

駄文ですが、お楽しみください。

旅にお金は必要です。

マギｓｉｄｅ

村を出た俺たちは父親の知り合いがいる麻帆良学園を目指して旅をはじめたんだ。麻帆良は前世の故郷日本にあるらしく、最初はね、俺は柄にもなくはしゃいでいたんだよ。そう、麻帆良についてから、うちのバカが一銭の金を持ってきてないという天然ボケをしるまでは。

「お前やっぱバカだろ。……いや知ってたさ、お前がどうしようもない鳥頭て知ってたよ。でも、金くらい出ていく前に用意しとけよバカナギがぁ！！」

ヒュウ～、ドッカァーン！！！

「うを、あぶね。しょうがねーだろ。忘れちまったもんは。それより、急に魔法ぶちこんでくるな、バカアニキ！」

ゴロゴロ、ズッカン！！！

「お前にだけには、お前だけには、バカと言われたくはないわぁー！！・・・はぁはぁ、馬鹿らしい、体力の無駄遣いだ。」

なんかいろいろ疲れたよ、お母様。このアホ（ナギ）の面倒を見るのは大変。とにかく今はどうやって路銀を稼ぐかだな。今ちょうど、麻帆良祭という行事中らしいから何らかの賞金大会か何かないかな～。うん、なんかの広告か？何々、賞金百万円、まほら武闘会だって。ラッキー、いい物件を見つけた。さすが幸運ＥＸ。あれ？でも、なんで俺って騒動に巻き込まれやすいんだろう。また、あの

幼女の仕業じゃないだろうな。あやしい。

「ナギ、この大会に出るぞ。賞金出るし、もしかしたら強い奴と戦えるかもしれないぞ。」

「うぉ、さすが兄貴。早く申し込もうぜ。」

「うん、そうだな。受け付けは中央広場であるらしいし、締切が近いから急ぐぞ。」

「おう」

俺たちはすぐに受付をして、予選に出た。俺たち二人はAブロックらしい。

・・・はっきり言おう、弱かったと。まぁ、一般人相手じゃこんなもんか。でも、Bブロックの日本刀持った剣士は強そうだった。今のナギ同等、近接戦闘じゃ俺も負けるかもしれないな。なかなか楽しみだ。

強い相手との戦いは心躍る。ふふ、明日の決勝トーナメントは楽しみだ。青山詠春、どんな闘いをするのかな。やっぱ観客の度肝を抜きたいね。さぁ明日に向けて仕込んでおこう～と。

次の日・・・

「さぁーやってきました、まほら武闘会決勝トーナメント。古今東西あらゆる武道の達人が己の体で、技術で、そして心でぶつかり合うこの熱き闘いが今始まる。括目せよこれが武の極致である。」

うおー！！！！！！！！！！！

ナレータの演説のおかげか、見に来た観客のテンションは一気に上昇している。ここ麻帆良はいろいろとぶっ飛んでいる。麻帆良にある丘の上には世界樹と呼ばれる木がある。その木、真の名を神木・蟠桃というらしく、世界でもトップクラスの魔力含有量らしい。また、霊地としての格は一級ぽい。そして何より、学園全体にかけられている認識阻害魔法。これのため予選でも魔力や気を無詠唱ではあるが使っている人を見ても何もおかしいとは思ってないらしい。

間違いなくここは魔法使いの天国だね、一般人からしてみればいい迷惑だろうけど。

さて、決闘への準備でもしますか。ナギと当たるのは決勝か。そこまで負けないと思うけど、油断はしちゃ駄目だな。

時が流れ準決勝・・・

「次は準決勝、ここまでその精錬された剣技を見せてくれた青山選手。対するはこの大会に神風のごとく現れたスプリングフィールド兄弟が兄マギ選手。ここまでの全て一撃で倒してきている両者。どんな闘いになるのか必見です。それでは、始めっ！」

俺は合図の後すぐ瞬動で相手の後ろに回り込み遅延呪文で魔法の射手１７矢を撃ち込む。

しかし・・・

「神鳴流に飛び道具はきかん。はぁー、斬岩剣(ざんがんけん)」

ていって放った魔法全てを撃ち落とされ、なんか地面にクレーターができるほどの上段切りがきた。木刀でこの威力、真剣ならどのくらいと少しビビった。

しかし、こちらもなめてもらって敵わない。これでも魔法世界の異端児とまで言われている俺がただの魔法の射手など打つわけがない。

「青山詠春だっけ。すごい剣の使い手だね。君みたいな人を侍ていうのかな、とても楽しい闘いだったよ。」

「確かに私は京都神鳴流青山詠春です。マギ殿も入りと出がほとんどわからない瞬動いやもうそれは縮地ですね、その技術すばらしいものです。それよりだったよ、とはどういう意味なのです。私はまだまだ闘えますよ。」

「ふむ、まだ気づかないの。ほら周りの観客も叫び始めたよ。」

「なにを、言って……はぁ!?」

詠春はいつの間にかパンツ一丁になっていた。俺は魔法の射手に衣服の繊維を溶かす魔法を組み込んでいたのだ。それが木刀で撃ち落としたあと発動。空気中に分散した魔力残根が服を溶かしたという絡繰りさ。まったくもって無駄遣いと言われるが、武装解除と違ってこちらのほうがロマンがあるだろ（キリッ）まぁ、男に使うものではないが、、、いや、もう男に使うのはこれっきりにしよう。気持ち悪い。

「はいポーズ。ほらほら、君の写真集を全国ネットに流してあげるから頑張って。きっと露出狂のお友達ができるさ。」

パシャパシャ、パシャパシャパシャ

「うおー！そんな友達いらないから！カメラで撮るのはやめてくれ。参った参ったから！！」

「う～ん…………いや！（キラリンッ）」

「NO！！！！！！！！！！！！」

この後、大会監督が止めるまで赤い悪魔のいじめもといカメラのフラッシュ攻撃は止まらなかった。

一人の変態ドＳのせいで、将来勇猛な青年の一生のトラウマができ、観客が同情と憐みの言葉を送ったのは言うまでもない。

これが将来サムライマスターと呼ばれた英雄と紅蒼の魔王、戦場カメラマン、敵に回したら必ず殺される（社会的な意味で）と呼ばれた英雄との一方は決して思い出したくない哀愁溢れる出会いである。

続く……

旅にお金は必要です。（後書き）

まず一言、どうしてこうなった（笑）いやぁ～最初はまともに闘わせるつもりだったのですが、最後はまるっきり主人公が変態化してしまいました。

私的にからかうのＮＯ２に位置してますから彼。

詠春君が精神的苦痛で円形脱毛症にならないよう、ご冥福をお祈りいたします（笑）

次回の投稿は少し遅れるかもしれません。まぁ、そこは学生の忙しさを考慮していただけると幸いです。

新しい仲間（前書き）

三日ぶりの更新です。なかなか大変でした。

ではお読みください。

新しい仲間

近衛近衛門ｓｉｄｅ

「あ、あにき、路銀を忘れたのは謝るからも、もう許してくれ！」

「何言ってんのナギ。俺はぜんぜぇ～ん怒ってないよ～。」

「滅茶苦茶怒ってんじゃん！目がマジなんだよ！」

「あん？なんか文句あんの？幼少の頃の黒歴史を暴露されたいの？うん？」

「なまいってすんませんでした！！だからあの事だけはあの事だけは！！」

闘技場の中心に手足を縛られている赤毛のアホっぽい少年ともう一人は同じく赤毛なのじゃがひどく冷酷な微笑みを浮かべながら魔力弾を当たるか当たらないぎりぎりに撃つ少年。これ何というんじゃったかのぉ？ほう、そうじゃった、こういう場合こういうんじゃ。

「これ、なんてカオス？」

一週間前じゃったかのぉ、知り合いの魔法使いから息子二人がこちらに来るという連絡があったのじゃ。兄は魔法反射というアリアドネードの学者たちが挫折し不可能としたその理論をわずか六歳のころに確立したまさしく魔法の申し子。一方弟のほうは理論など全てぶっ飛ばして魔法を使うバグ、また調査によると精霊に愛されておるらしい。

タイプは違えど二人とも間違いなく天才。しかし、友人の話しではかなりの問題児らしい。儂は当初そこまで気にしておらんかったのじゃが、その意味がこの大会で良くわかった。特に兄のほうは敵に回したら絶対にいかんタイプじゃ。儂もよく妖怪とまちがえられるがマギ・スプリングフィールドは悪魔という言葉でさえ霞むチートドS大魔王様じゃ。マジ儂ちびりそう。

「俺も家族の恥は言いたくないよ。だからばらしはしない。安心しろ。」

「本当か！？ありがと「ただし勝負はまだ終わってないからね」いーやー！！！！」

そろそろ止めたほうが良いじゃろうか？じゃがさっき婿殿を助けたときすごくにらまれたのじゃが、どうすればいいんじゃろう。とほほ、腹が痛い……

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

マギｓｉｄｅ

ふういい仕事したよホント。久しぶりにストレス発さｎげふんげふん強者との闘いができて気持ち良かったぁ～。

あの後、俺はナギをボコボコにした後棄権した。え、なんでかって優勝しようがしまいがどちらにしろお金は入ってくるからね。そこまで順位は気にしない。まぁナギの奴は戦闘の疲れで保健室で休んでるけど。いやぁ色々たまってたんだろうね、半年分ぐらいの恨みを込めて魔力弾ぶちこんだし。

で、それよりも

「さっきから俺いや、俺とナギを観察してる奴そこに隠れてんだろ。出てこいよ。」

そうさっきから俺たちのことを見ている奴がいることはわかっていた。まぁ敵意がないからほっといたんだけど、さすがに観察されるのは気持ち悪い。

「おやおやバレテないと思っていたのですが、いつ頃から気づいていたのですか。」

そういいながら出てきたのは、ローブをかぶり胡散臭い笑みを浮かべた男だった。

「う～ん今日あの剣士と闘っているときかな。なんか観察するような視線を感じてな、なんとなくね。で、一体何の用？」

そういいながら俺は戦闘態勢に入る。いくら悪意感じなくとも隠しているという場合もある。こちらの世界はかなりシビアな世界だ。油断したら最後死があるだけだ。

「えぇ、実は私をあなたたち三人の仲間の入れてほしいのです。」

「はぁ？それより三人とはどういう意味だ？俺たちは二人で旅をしてるんだが。」

マジで何言ってんだこいつ状態である。

「ふふ、私のことは気づいたのにもう一人の方は気づかなかったようですね。ねぇ、露出狂さん」

露出狂!?ま、まさか!?

「私は露出狂ではない！だいたい人のトラウマを思い出させるな！！」

「青山詠春（露出狂）！なんでここに？」

「なにか私の名前に不愉快な補足がついているようなんだが。まぁいい。私もお前たちの旅に連れっていってくれないか？」

「マジで言ってんのか、お前のトラウマを作った原因だぞ俺。」

実はこいつマゾなのか。俺は男のマゾに興味なんぞないぞ。つーか変態じゃないか。

「いやなんでさりげなく俺から距離をとるんだ二人とも。まぁいい、本題に入るぞ。確かにお前はトラウマの張本人だが感謝してる部分もある。私は青山家の中でも天才と呼ばれていて自分でも知らないうちに天狗になっていたようだ。しかし、世の中にはまだまだ強い奴がたくさんいることがわかった。私はまだまだ強くなりたい。そのために君たちについていきたい頼む！」

へぇ～逆上するんじゃなくて、自分の欠点を素直に認め改善しようとするなんて人間できてんなぁ。俺だったら何倍返しにしてやろうかと考えるのに（笑）

「うん、まぁいいよ。いちようナギにも聞いてみないとわからんけどたぶん大丈夫だろ。俺のことはマギと呼んでくれ。」

「恩に着る、私のことは詠春と呼んでくれマギ。」

「で、お前は結局誰なの？」

なんだかんだ言いながら、このローブ男の素性は一切わかっていない。不気味すぎる。

「私はアルビレオ・イマ。アルと呼んでください。私は世の中の面白いものを探して旅をしています。今回はあなたたちと旅をすれば面白いことがあると思いまして話しかけてみました。」

素性はすごく怪しいけど、たぶん教えてくれないだろうな。まぁとりあえず、

「いいよ、あんたもなかなか面白そうだ。よろしくアル。」

こうして、四人（一人爆睡中）はともに旅をする仲間となった。

「アニキ晩飯、腹減ったぁ～、むにゃむにゃ。」

「空気読めやこのバカナギ！」

ゴンッ！

「ぎゃあーーーー！！！」

四人の出発はまだとおいのであった。

続く……

新しい仲間（後書き）

だんだん、主人公が壊れていってます。誰か止めて～。まぁ私が原因なのですが。

今回の話しはどうだったでしょうか。

なるべくほのぼの路線で行きたいと思います。

次回は魔法世界に入ります。

それではお楽しみに。

結成、紅き翼（前書き）

ど～も、お久しぶりです。今回は魔法世界での話です。

結成、紅き翼

マギｓｉｄｅ

おっす！おら悟空じゃなくてマギだ。俺たち四人はイギリスにあるゲートを潜りいま魔法世界（ムンドゥス・マギクス）に来ている。空飛ぶＵＭＡや亜人と呼ばれる猫耳少女など一部のマニアなら鼻血を出しながら喜ぶような光景である。

「おい、みんな。これからどうする？」

「そうですねぇ～まずは学園長の紹介状をもって連合に行きましょう。」

「そうだな、俺たちはまず拠点さがしに入らないといけないから、近衛殿のご厚意にお甘えよう。」

「俺は闘えるなどこでもいいぞ。」

アルと詠春は同じ意見らしいな。まぁそこらへんが妥当だろう。あ、あとナギお前にはあまり期待してないから。

「じゃあ、このマクギル元老院議員って人のところに行きますか。

アル交渉ごとは任せた。」

「ふう、あなたもできるでしょうに。」

「え、だるい」

「即答ですか。わかりました。では行きましょうか、（メセンブリーナ連合）へ」

そして俺たちは元老院へと足を運んだ。最初に受付をすまして客間へと通された。待つこと十分、ようやく現れたのは人のよさそうなオッサンだった。

「おお、待たせてすまんのう。儂はマクギル、元老院の議員じゃ。して、君たちが近衛門の紹介の物かの？」

「初めまして私はアルビレオ・イマと申します。」

「私は青山詠春です。」

「おれはマギ・スプリングフィールド」

「俺はナギ・スプリングフィールド。よろしくなマクギルのオッチャン。」

「こらナギ議員に対して何という。」

「よいよい、そんなに形式ばった言葉は使わなくていい。」

なんともフレンドリーなオッサンだな。まぁそのほうが楽だけど。

その後、アルの交渉の結果、俺たちは連合の志願兵として紛争地域や戦場に出ることになった。まぁナギの奴が後先考えずＯＫ言っちまったからな。あいつ戦闘しか興味ないだろう。

近年、連合と南にある亜人の国ヘラス帝国との間で戦争が起き始めようとしているらしい。そのため戦力が是非にも欲しいらしい。まぁ金が良かったし、当初の目的の強者との闘いができるからナギと詠春はいいだろう。

さて俺もそろそろ活動しますかね。

「なあ、俺たちのチーム名を考えないか？」

ナギが突然提案を出してきた。

「いいですねぇ～、私は昔戦隊モノに憧れてたんですよ。」

「お前はたぶん悪の幹部の参謀だろうな。」

「それならお前は魔王を倒した後、やっと勝ったと思ったらＬｖ．９９９の超無敵大魔王様だろうな。」

「「うんうん」」

「馬鹿野郎！俺が大魔王ごときにおさまるか！！！」

「「「突っ込むとこそこ！？」」」

なんかアホみたいなことやってるけどこんなんで大丈夫か？

「で、なんかあるか詠春？」

「話が急に変わったな。そうだな和同一門」

「サムライですね、わかります。」

「私は幼女愛好会がいいです。」

「うん、とりあえず死ね。」

はぁ、まともな案がねぇ～。

「ナギはなんかないのか？」

「紅き翼（アラルブラ）ってのはどうだ？」

「「「おおすごくいい！」」」

ナギが自分で考えて発言するなんて、お兄ちゃんは感げ「なんか、雑誌に書いてあったんだ。」

「俺の感動かいせやー！！！」

「ぶっは！！」

本日のナギの飛距離プライスレス。

これが伝説に残る「紅き翼（アラルブラ）」の結成の瞬間とは誰も信じたくない事実である。

続く…

結成、紅き翼（後書き）

次回は人物紹介します。

よろしく。

主人公紹介（前書き）

少し改訂しました。

主人公紹介

主人公；マギ・スプリングフィールド

年齢；１３歳（大戦期）ナギの一つ上。

性別；男性

ステータス

筋力：Ｃ＋（Ａ＋）

耐久：Ｂ－（ＥＸ）

敏捷：Ａ＋（Ａ＋）

魔力：Ｓ＋（Ｓ＋）

気力：Ａ－（Ａ－）

幸運：ＥＸ（ＥＸ）

＊：（）はノアの能力を使った場合。

始動キー

ネギス・ネガサス・ネー・ジーサス

葱への深い恐怖心から生まれた始動キー。まぁまぁカッコよくない？

能力

・魔眼（ライナ＝エリス）

『伝説の勇者の伝説』に出てくるあらゆる存在の構築式が見え、また視認したその存在を分解したり構築したりすることができる。原作では能力の代償に「自分の愛する人を犠牲にする」ことで発動す

るが主人公はその代わりに魔力消耗となっている。魔法使いとして主人公は本質の能力ではなく、魔法の術式の解読によく使っており戦闘ではあまりにも強力なため緊急時以外は使わない。

・ノアズメモリー
『Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎ』のノア力。しかしこの能力を使ってしまうと快楽（万物の選択）のメモリーで攻撃事態が効かなくなるというムリゲーになってしまうので、これも緊急時以外は使わない。だが、色（あらゆるものに変化する）、蝕（相手の中に蟲を忍び込ませるなど）、智（相手の脳を自由にできるなど）といった能力は諜報活動の時よく使う。また、移動するのが面倒な時よく夢の能力を使ってるとかなんとか。

・直感（ＥＸ）
これはもはや予知や予言レベル。だいたい十秒先の行動がわかる。また自分の危機などは寝ているときなどに夢で出てくる。しかし、なぜかギャグ補正やナギのアホな行動には機能せず若干能力をくれた神に対し腹を立てている。

・巻き込まれた体質（ＥＸ）
俗にいう、主人公補正。このため幸運や直感などが働かないときがある。ぶっちゃけ、神のミス。しっかりしろ幼女神。

武器
・魔法杖（世界樹産）
原作ナギが使ってる杖と兄弟杖。世界最高峰の魔法発動体。

・？？？
マギにとっての最強の切り札。でも形が嫌いで緊急時以外使わない。形は本編でわかります。

紹介
ナギの血を分けた一つ上の兄。弟の突然の行動にいつも悩まされていると思っているが、トラブルメーカなのは主人公も大して変わらない。

前の世界で葱で転んで死んだという何とも悲しい人。なんかよくわからないところで、神様に出会い能力をもらい転生。原作は知らないらしい。

性格は割とドライで大人しいが一度Sの心に火がつくと、あの鬼畜幼女大好き神アルビレオ・イマまで引くぐらいのドS大魔王様。本人いわく世の中攻めてなんぼらしい。うん、意味がわかない。

魔法の訓練を始めたころからチート開始。現存する魔法は禁術以外ほとんどマスターし、アリアドネーの学者が不可能とした『魔法反射』を作り出した天才。現在新しい魔法と失われた魔法（ロストマジック）を研究している。

また、情報収集が趣味でよくノアの能力を使っての諜報活動をしており、黒いノートを持ってはあちこちの組織に入り込んでいる。本当お前はどこのスパイだ、と言いたい。蛇足ではあるがナギたち紅き翼のメンバーはその黒い本のことを「デス・ノート（社会的意味で）」と原作のファンに怒られそうな名前で呼んでおり、それが世間に出ないことを祈っているらしい。

戦闘スタイルは基本後衛。しかし前衛ができないわけではなく前世の記憶にある合気道を主体とした柔の格闘術。また魔力によるブーストにより身体能力を2ランクあげることができ、近接専用の新魔法『メシアの祈り』は魔力の半分を代償に5ランクあげることがで

きる。ただし、３０分だけ。

主人公紹介（後書き）

次回、ヒロイン登場！？
こうご期待！！

謎の鉄仮面美女！？（前書き）

なかなか難産でした。

謎の鉄仮面美女！？

マギｓｉｄｅ

連合で仕事を始めてから早一年、俺たちもだいぶこちらの生活に慣れてきた。途中辺境の森に任務で赴いたときフィリウス・ゼクトというみため白髪のショタにあいナギとの戦闘になった。結果ナギがけちょんけちょんにやられた。で、ナギがゼクトに弟子にしてくれと嘆願、最初のうちは断っていたが、毎日に訪れるナギに根負けし魔法を指導してくれることになり、紅き翼の一員となった。ゼクトは見た目あんなんだが、実際は不老で俺たちの中で一番の年長者。魔法の技術も俺より上だった。いやぁ～天才なんて言われていたから天狗になっていたのかな。

さすがに悔しかったので俺も弟子入り。この修行で俺は真のチートに目覚めたよ。ゼクトは長い間生きてるだけあり、古代呪文など現代では使い手が少ない魔法など見せてくれた。そのおかげでいままで滞っていた新魔法が次々完成した。完成した魔法をゼクトに見せに行ったりしたときなぜか遠い目をしながら、こやつもバグか、と呆れた声が聞こえたのは気のせいだと思う。で、一か月でゼクトおじいちゃんの魔法免許皆伝をもらった。ゼクトお爺ちゃんありがとうと言った瞬間、萌える違った『燃える天空』が撃ち込まれた。以外に歳を気にしていたらしい。

ナギはいまだアンチョコ見ながらだが、魔力運用及び術式の理論的展開ができるようになりかなりレベルアップした。ぶっちゃけた話、

基礎もできていないかったナギの成長率はすさまじく、本来の膨大な魔力と精霊の加護を受けているナギは魔法世界の中でも上位に上がってきている。これでもう少し頭良くなるといいんだけど。いっそのことアリアドネーにぶち込むか？

詠春は自分の剣を見つめなおし、一族の一つの極致、反転をものにしようと修業を重ねた。反転しているときはバーサーカーみたく理性が吹き飛ぶらしくそれを制御失敗するたびに俺の新魔法の実験台になっている。修業をはじめて半年何か少しつかんだらしくニヤニヤしていたのでムカついて詠春恥ずかし写真を俺たち紅き翼のホームページ（俺が作りました）に載せた。その後、俺のパソコンが真っ二つになった。あれ、二十万したのにＯＲＴ

アルは俺と一緒に情報取集したり、ナギの魔法修業を手伝ったり、ゼクトと魔法談義したり、詠春をからかったりしている。あれこいつ仕事してねぇ～。この前も幼女ナンパしてたし。明日あいつの寝室に熟女の写真で囲ってお婆ちゃんボイスの目覚まし時計仕掛けよ。次の日アルは飯を食べなかった。すまんアル、やり過ぎた。

で、俺はというと魔法の修業が一段落ついたので、今度は気のほうを重点的に鍛えることにした。気とは生命エネルギーと深く関わっているものなので修業メニューは体を鍛えることから始まった。転生してから魔法に頼りっぱなしの俺は魔力ブーストがなければ身体能力は一般人とあまり変わらない。そのため修業当初は筋トレを中心とした。ここでつける筋肉はボディービルダーごとくムキムキではなく戦闘に応じた体作りをしないといけない。

筋肉には先に述べたボディービルダーのように見えるアウターマッスルと表面ではなく中にあり見えないインナーマッスルとがある。このインナーマッスル、普段余り使わない部位のため鍛えるのがすごくきつく、筋肉がとても熱を持ち始め熱くなる。本当に地獄だったが半年鍛えることによって柔軟性のある細マッチョとなった。前世では運動嫌いの自分だったが、この修行を通して体を動かすのが好きになった。

話しが脱線したため戻すが、残りの半年は詠春との組手と、漫画をもととした気を用いた術の開発に勤しんだ。この術の開発で『ＮＡＲＵＴＯ』でお馴染みの影分身の術を完成させた。これにより原作の主人公ごとく膨大に分かれたりはしないが一人が魔法、一人が気、一人が諜報と活動幅が増えた。ちなみにナギにこれを教えたところ一発で成功。なんとなくで出来てしまったという弟に軽く殺意が芽生えた。かなり落ち込んでいる俺に詠春がお前もあまり変わらないと言われさらに落ち込んだのは秘密である。

と、まぁ途中何ともふざけたこともあったが割と充実した一年だった。後、赤き翼の目的が変わったこともこの一年の中でのことだ。最初の頃はリーダーであるナギの力試しが目的だったが、任務中ナギと仲良くなった一人の少女が流れ弾に当たり治癒魔法が碌に使えないナギでは手当が遅れ亡くなってしまうという戦争ではありきたりな悲劇があった。ナギはそこで初めて自身の持つ魔法という武器の恐ろしさに気付く。茫然と少女を抱きしめるナギを見て俺自身も深く考えさせられた。自分がよく考えづに撃っていた魔法でどれだけの人が亡くなったのかと考えたとき激しい自責の念に押しつぶされそうになった。

それからナギと俺は今まで力を入れてこなかった治癒魔法をゼクトから学んだ。そして方針である、戦闘ではなくこの戦争をいち早く終わらせるために戦うと決めた。矛盾を孕んではいるがすでに俺たちは立ち止まることができない。まぁ、まともな死にかたはせんだろう。

戦争を終わらせるためマクギルなどに働きかけているのだが状況はお世辞にも芳しくない。しかも諜報活動を続けているうちにこの戦争自体がきな臭くなってきた。俺の直感がこの戦争は何か裏があると見た。

そんな訳で、俺はまだ調査していないウェスペルタティア王国の首都オスティアに来ていたのだが、途中フード着た人物が所謂ＤＱＮに絡まれていた。無視しても良かったんだが、後味が悪い。そう思って声を掛けたのが全て神によって仕組まれた運命だったのかもしれない。これは俺にとっては最悪で、後から最高と変わる出会いだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

妾はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア、この国の姫じゃ。最近、国境付近で帝国の部隊が駐屯しているらしく、国の中はとても

緊張している、そう聞いた妾は視察のため町を歩いていたのが失敗じゃった。

「おい、お前！俺の肩にぶつかっておいて謝罪の一つもないのかよ。」

町を歩いている最中、モヒカン頭に呼び止められた。周りにも生理的に受け付けられないような取り巻きたちがいる。肩にぶつかった感触はなかったがここは穏便に済まそう。

「ふむ、すまかった。これで良いじゃろう？」

「てめぇ、なめてんのか！ぶち殺すぞ！！」

「誰が貴様などをなめるか！気持ち悪いはこの下郎が！」

何を言うかと思えば言うに事欠いてなめろとな、ふざけておる。

「そういう意味じゃねぇよ！てか、お前たちもなに一歩下がってんの？」

「いや兄貴にそんな性癖があるなんて……いや人の趣味はそれぞ

れですよ。気を落とさないでください。」

「いやそういう性癖とか無いからね！頼むからそんな可哀想な子を見るよな目つきで見ないで！！」

なにやらこやつ変態らしいな（勘違いです）。揉めている間に逃げよう。

「だから、だから違うって…うん？てめぇなに逃げようとしてんだよ。てめぇのせいだろうがこの状況は！」

奴はそういって拳を握り殴りかかってきた。小さい頃から護身術を習ってはいたが突然のことで身動きが止まってしまった。殴られる。

そう思い目をつむり衝撃を待つがなかなかこん。さすがにおかしいと思い恐る恐る目を開けると……赤毛の少年がモヒカン頭の拳をつかんでいた。

「て、てめぇなにもんだ！？手を放しやがれ。」

「いやぁ～手放すとまた殴りかかってくるでしょうに。しかも君変態らしいじゃない。お袋さん泣いてるよ？」

「だからだから、俺は変態じゃないんだ。信じてくれよ。」

「犯人（アルビレオ・イマ）はみんなそう言うんだ。さっさと吐いて楽になっちまえよ。」

「……もういい。お前らやっちまうぞ。」

「「「おうっ！」」」

少年とモヒカンのよくわからない言葉の応酬は少年に軍配が挙がったが今度は暴力により訴えるようじゃ。いかんこのままでは罪の無いこの少年が変態の餌食になってしまう。

「お、おぬし早く逃げるの「これだからＤＱＮは。口で勝てんとすぐに手が出る。カルシウムが足らんぞ。小魚食べろ、小魚。」じゃ。はぁ！？」

一瞬じゃった。妾の見えぬスピードでモヒカンたちを気絶させた。こやつ見た目に似合わずなかなかの強者らしい。

「よう、大丈夫か嬢ちゃん。」

そんなことを考えている間に先ほどの少年が転んだ妾に手を差し伸べてきた。というより妾は嬢ちゃんじゃないわ。そう文句を言ってやろうと立ち上がろうと力を入れたら、

「こ、腰が抜けてしまったらしいのじゃ。」

何たる不覚。王族としてあまりにも情けない。少年も爆笑しとるでない。

「ぶっ、ははははすまんすまん。ほれ、家まで負ぶってやるよ。」

「なっ／／／そんなことせんで良い。」

「じゃあどうやって帰るんだ？」

ぐぬぬ、ここは少年の好意に甘えるしかないか。

「へ、変な所を触るでないぞ。」

「おいおい、自意識過剰の女は持てんぞ。」

妾は即座に王家の魔力を纏った拳を無礼者に振り上げる。

「うげっ！」

少年が数メートル飛んだ。爺仕込みの王家パンチに死角なし。

「てめぇ、なにしやがる！てかなんで俺の魔法障壁をすり抜けた！！」

「乙女の怒りじゃ！」

「どこの世界に男をぶっ飛ばす乙女がいるんだよこの暴力鉄仮面！」

「どこに男なんかがおる。妾の前にいるのは塵屑に等しい有機物じゃ」

「この枝分かれ眉、助けってやったことの恩を仇にしやがって、てお～いなにそんなに殺気出されてるのぉ～。」

こやつは言ってはならぬことを言いおった。

「だ・・、え・わ・・ま・じゃ」

「はい？聞こえませんよ？大きな声ではきはきと言いましょうって学校で習いませんでしたか～」

「だれが、だれが枝分かれ眉じゃ！！！！」

「ふべら！」

注意・女性の身体的特徴をネタにすると主人公のごとく星になってしまうので、世の男性方は気を付けましょう。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

マギｓｉｄｅ

現在俺はオスティアの町を回っている。事の発端は俺の余計一言が原因だ。反省もしてるし後悔もしてる。ただ、今の状況は納得できない。

「ほれ、さっさと歩かんか。」

「お前俺におんぶされている身分のくせして態度デカすぎるだろ。」

そうこの厚かましい金髪美少女をおぶりながらの行動だ。重くはないが動きづらい。

「身分差別は好きではない。」

「じゃあ少しは俺を労われこの能面鉄板少女。はぁまぁいい。そういや名前聞いてなかったな。俺はマギ・スプリングフィールド、あんたは？」

「妾はアリカじゃ。都合あって下の名前は教えられん。……ちょっと待て、お主の名前はマギ・スプリングフィールドといったな？」

「ああ、そうだけど。」

「それじゃ、お主が紅き翼の『紅蒼の魔王』か？」

「まぁな、俺その呼び方嫌いなんだけどな。」

うんホント嫌い。どこの厨二病だよ。まだ、戦場カメラマンがいい。

「じゃが、なぜ蒼なんじゃ？紅は髪の色とわかるのじゃが。」

「ああ、蒼も髪の色からきてるのさ。」

「お主ついにボケたのか。どこからどう見ても赤髪じゃろう。」

これ良く言われるんだよね。お前どこから見ても赤いじゃんて。前に俺は魔力超過現象という病気を患っていてマジックアイテムで自分の魔力量を抑えているといったのを覚えているかな。あれはいわばリミッターみたいなもので、つけている間はいろいろと制御されているわけ。だから本気を出すときや緊急時の時には『ハーメルス（神を縛る紐）』という髪留めを外すわけ。そうするとなぜか知らないが髪の色が青くなるのよね。この病気の人はみんな青い髪の色をしているらしいけど。まぁそんなリミッターを外しているときの俺は絶賛無双状態。そのイメージが帝国にあるらしく、めでたく厨ニな二つ名がついたわけ。

「なるほど、そういうことじゃったか。まぁよい、さっさと行くぞ。」

「へいへいお姫様。」

この皮肉が実はすごく的をいた発言だったことに気付くのはまだ先のことである。

『緊急避難警報！緊急避難警報！オスティアに住む一般市民に告ぐ。現在帝国の大部隊が国境を越え我が国に宣戦布告。至急避難するように。』

なんだ急に。帝国がこの国を落として何のメリットがある。

「おい、アリカ嬢。あんたをすぐに避難場所に転移させるからよろしく。」

「ま、待て妾はここに「悪いがここの防衛に行かないといけないからな、縁があったらまた会おう。」人の話を聞け…」

とにかく転移をすませたからあのおっかな美女は大丈夫だろう。なんか言いかけてたけどなんだったんだろう。いや、今はナギたちに現状を伝えここの防衛線を手伝ってもらわないと。

『おい、アニキ聞こえるか。今俺たちはオスティアに任務で来てる

んだがアニキも早く来て手伝ってくれ。』

ナイスだ、ナギ。お前の行動力には感心する。

「それなら大丈夫だ。俺もこちらに来ている。お前は今どこにいるんだ。」

『おお、さすがだなアニキ。俺たちは今城の離宮に来てんだ。帝国が鬼神兵を出してくるから俺たちでもきつくて。』

確かにあの図体でかい奴は厄介だな。

「わかったすぐ向かう。やられるなよ。」

『へへ、誰に言ってんだアニキ。俺は最強の魔法使い「千の呪文の男」ナギ・スプリングフィールド様だぜ。アニキが来る前に終わっちまってるぜ。』

「まじ、じゃあ俺いかね。」

『冗談だからね、冗談。早く来てくださいお兄様。』

ナギよ。お兄様気持ち悪いからやめてくれ。それは妹キャラじゃないと駄目だ。

side out

謎の鉄仮面美女！？（後書き）

ギャグ路線のはずが前半はかなり暗い感じでした。

戦時中は少し真面目かな。

やはり微妙。

アリカ姫初登場。うまくかけていたでしょうか。

次回はオスティア防衛戦。

よろしく。

幼女を守れ！（アル活躍編）（前書き）

最初に題名はアルの部分は嘘です。

かなりの難産。

駄文ですがお読みください。

幼女を守れ！（アル活躍編）

ｓｉｄｅマギ

『総員退避！王宮に逃げろ！！』

戦場の中で連合側の司令官と思わしき人物が撤退命令を下している。状況はこちらがかなり悪い。オスティアに駐在する軍自体が少なく国軍だけでは帝国との戦力差は歴然とある。そのため最後の砦である王宮の傍にて交戦をするのだろう。

「胸糞が悪い。オスティアの上層部は人の心があんのか。」

そう最後の砦である、黄昏の姫巫女アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシの下へと。

『き、鬼神兵だー！帝国が攻めてきたぞぉ！！』

クソ、急がなければいけねぇ。鬼神兵となると並みの魔法使いでは歯が立たないだよなぁ。てかあれ卑怯だろ。あれだよ、仮面ライダーが敵を倒すときウルトラマン連れてきたって感じだよ。え、意味が分からない。そこはあれだ、感じろ、空気読め。バカなこと言ってないで早く行かないとといけないな。

そう思い杖に乗って離宮へと飛ばしていく。途中でナギたちと合流。ナギは子供を戦争の道具にしてることにかなり腹を立てている。まぁそうだよな。

ちなみにアルは

「戦争ですからねぇ。見た目通りの年齢かすらわかりません。ですが幼女は愛でるもの。強制するものじゃないんです。」

と豪語されていた。前半は少しはまともかとおもったが後半がすべてを台無しにしている。なんか病状が悪化していないか。

「いや、もう手遅れです。」

と、何か受け取ってはいけない電波を受け取ってしまった。俺、この戦争終わったら病院行こうかな、と死亡フラグなのかどうかわからないフラグを立てたのは俺しか知らない。

『精霊砲全弾消失！』

『消失だと！？　王都の魔法障壁では無いのか！？　まさか……！』

『広域魔力減衰現象を確認……減衰速度加速中、間違いありません。“黄昏の姫御子”です！！』

やはり、この国の上は腐っているな。

「おい、みんな急ぐぞ！」

「そうですね、幼女のもとへと急ぎましょう。」

「はぁ、二人とも先に行くな。」

「詠春あきらめろ。バカとロリコンは止まらない。」

俺は学習したんだ。詠春、お前も早く慣れろ。そうしなければ、予定通り禿るぞ。

「俺は禿ん！！！」

そんな、緊張感のない中俺たちは姫巫女のところへと行くのだった。

side out

ｓｉｄｅ？？？

…私は何もない。…何も感じないし、すべてがどうでもいい。薄暗いこの空間で毎日を過ごしている。ここに来るのは食事などの面倒を見てくれるメイドと私に何かの薬を飲ませる気持ち悪い人間だけ。

「おい、早くこい！！」

今日もまた痛いことがあるのだろうか。いつも鎖で私を縛る。でも、それすらどうでもいい。私は一人、いつも一人なのだ。

パリッン！！！

私の能力で魔法が消える。私の能力は希少らしい。望んでない、そんなもの望んでない。

「そんなガキまで担ぎ出すこたぁねぇ。後は俺に任せときな」

「お、お前は、紅き翼（アラ・ルブラ）……千の呪文の……」

「そう、ナギ・スプリングフィールド！　またの名をサウザンドマスター！！」

「自分で言ったよコイツ」

「ナギ、嘘はいけないと思うぞ嘘は。」

「うるせぇよ詠春、アニキ。さっさと倒しちまうぞ。さぁて、行くぜ。百重千重と重なりて走れよ稲妻　『千の雷』！！！」

「へいへい、高速詠唱『ネギス・ネガサス・ネー・ジーサス、火の大精霊、水の大精霊、風の大精霊、地の大精霊、四大揃いて破滅へ導け、四大元素合成、根源消滅魔法〈エーテリオン〉』」

「お前たちは…はぁ～しょうがない、神鳴流奥義真・雷光剣（しん・らいこうけん）」

「ふふ、私も頑張りましょうか、重力魔法」

私の前に突然現れた四人が敵を倒していく。

「ふぅ、すっきりしたな。」

「あらかたの敵は倒したでしょう。」

「お前たちは少しは加減しろ。」

「そうだそうだ。」

「お前（あなた）（アニキ）がいうな（言わないでください）（言ってんじゃねぇよ）！！！」

「なにこれ、ひどい！」

私もそう思う。

「さて、安心しな。俺達が全部終わらせてやるからよ」

未だ私の傍にいる男に、そう告げる。

「な、しかし。敵の数を見たのか！？　お前たちに何が……」

「俺を誰だと思ってやがる、ジジイ」

「俺は、最強の魔法使いだ！　……魔法学校だけは中退だがな」

最後にぼそっと何かとんでもないことを言ったように思ったのは気のせいだろうか。

「フフ……どれだけあなた個人の力が強かろうと。一人では世界を変える事など到底……」

「あーあー、るせーよアル。俺は俺のやりたいようにやるだけだ。」

「ナギ、私はあなたをそんな我が儘に育てた覚えはありません！」

「俺はアニキに育てられた覚えがありません！」

赤毛の二人が何か言っている。あっさっき一番とんでもない魔法をぶっ飛ばした男と目があった。

その男は私を縛る鎖を壊してくれた。

「よう、嬢ちゃん。俺はマギ。嬢ちゃんの名前は？」

「名前……？　アスナ、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフォシア」

「う～ん、長いな。呼ぶときはアスナでいいか。」

そう言いながら赤毛の男マギは私の髪を撫でてくれる。とても温かい。

なんだろう、胸になかった、いやなくなった温もりが戻ってくる。

私がこれが心であると気づくのはまだ先のことであった。

side　out

一人の少女の救出の一歩目が始まる。彼女がこの世界のキーパーソンであることをまだ彼らは知らない。

物語は更なる加速を見せる。

続く…

幼女を守れ！（アル活躍編）（後書き）

最近少しシリアス。誰かシリアスブレイカーが欲しい。

やっとまともな魔法出せました。少し『ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ』からヒントをもらいました。

次回はみんな大好き？バグバカの登場です。お楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4842y/

魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

2011年11月29日01時57分発行